

Division by zero

かぶらやこうし
鏑谷 矢

ドアを激しくノックする音で目が覚めた。

反射的に腕時計を見ると、午後五時だ。

五時？そう呟いてから、今日が日曜日だったことを思い出す。頭が働かない。

首を回すと窓から差し込む秋の陽が、鉢植えに突き刺したハーケンに当たり、ベッドの上に長い影を落としているのが見えた。

頭の奥が鋭く疼く。

その間もノックは、執拗に続いていた。

無視しようとするが、不規則に続く刺激的な音は、洗濯機の中に紛れ込んだ車のキーのように頭の中を掻き回し、頭の芯が痛みで爆発しそうになる。

我慢できずに叫んだ。

「誰？」

「お届けものです」

ドアの向こうから、ノックの執拗さとは正反対の冷静な声が応えた。

ベッドから滑り降り、ドアチェーンをしたまま、薄く扉を開けて覗くと、

宅配便の服を着た若い男が、荷物を持って立っていた。

目が合うと、ちよつと驚いたような顔になる。

それで、金曜の朝から髭を当たっていないのを思い出した。

髭面に、酒と寝不足がスパイスとして振りかけられ、さらに酷い顔になっているのだろう。

「すみませんね。今日中に、これ配っちゃわないと叱られるんですよ」

男は、帽子に軽く手をやって会釈すると伝票を差し出した。

ドアの隙間からそれを受け取って、佐分利慎一とサインし、小荷物と交換する。

十センチ四方の小さい箱状のもだった。

重くはない。

「どうも。あ、それから、インタフォンの電池、変えといた方が——」

慎一は、話し続ける男の鼻先でぴしゃりとドアを閉め、鍵を掛けた。

一戸建てと違って、余計な近所付き合いが無く、そう思って引越したワンルームマンションであったが、外に通じるドアが、ベッドのすぐ近くにあるという避けがたい特徴が、大きな欠点となることを、実際に生活を始めるまでは気づかなかった。

近いうちに部屋を変えた方がいいかも知れない。

Lが付かなくとも、せめてDKが付く程度の部屋に。

もつとも……

ひどい二日酔いでガンガン痛むこめかみを揉みながら慎一は思った。

生活なんてどうでもいいさ。今の俺には。

何とか生きてはいるが、時折襲う、死んでしまいたいという衝動は、津波のように激しく彼を揺さぶり、翻弄していたのだ。

実際、佐分利慎一は、自分の精神が正気と狂気の狭間で危うい均衡を保ちながら、大きく左右に揺れるのを感じ続けているのだった。

三ヶ月前、北アルプス、北穂高。早朝。

連日降り続いていた雨は止み、濃い霧が山を包んでいた。

高校時代山岳部に所属していた慎一は、結婚後、強引に妻の聡美さとみを北アルプスに連れて行った。

大手電機メーカー重役の娘として、テニスやゴルフならいざ知らず、登山とは無縁の生活を送ってきた聡美であったが、初めての槍ヶ岳登山では、意外な頑張りを見せた。

その日は山小屋に泊まり、翌日の早朝から昇った槍の穂先で見た、三六〇度遮るものない雲上の大パノラマに、聡美はたちまち山の魅力に取り憑か

れてしまったのだった。

以来、年に一度、まとまった休みが取れる夏に、二人で行く北アルプス登山が、子供のいない佐分利夫婦の恒例行事となったのだった。

お盆の前後は非常な賑わいを見せる北補高も、八月後半になると急に人影が少なくなる。

今年は大候不順で雨続きであった上に、地震も頻発していたので、珍しく、山頂付近にはほとんど人影は無かった。

前夜、小屋に一泊し、早朝、眼を覚ますと雨が降っていた。

手早く朝食を終え、涸沢に向けて出発する頃には、雨は濃い霧に変わり、それらは、むき出しの岩肌にまつわりつくように山を取り囲んでいた。

つまり、視界は極端に悪かったのだ。

二人は、雨具を身につけ、足下を固めて慎重に下山し始めた。

声を掛け合いながらゆっくりと山道を下る。

慎一が励まし、聡美が振り向いて笑顔を見せる。

事故が起こったのは、小屋を出て、十分ほど下ったガレ場にさしかかった時のことだった。

聡美が突然バランスを崩したのだ。

足を滑らせたのか、崖から身を乗り出すような格好で、谷に向けて倒れ込む。

慎一は、氷で出来た手で心臓を掴まれたような気分になったが、聡美がころうじて滑落を免れ、登山道から数メートル下の岩にとりつくことができたのを見ると、素早くロープを岩に結んだ。反対側を輪に結ぶ。

指が震え、呼吸が苦しかった。

聡美に投げると、うまく掴んだ。

慌てないように、声を掛けながら、ロープを体に回させる。

体を輪に通した時、とりついてた岩が崩れた。悲鳴が靄を切り裂く。

次の瞬間、聡美はロープ一本で空中にぶら下がった。

「大丈夫か！」

そう呼びかける慎一に、恐怖に必死で耐えながらも、聡美は気丈に微笑んだ。

大丈夫、信じています。

瞳がそう語っていた。

が――

一瞬後、慎一の目は信じられない光景を捉えていた。

微笑みを浮かべたまま、聡美が遠くへ離れ始めたのだ。

全身が針を刺されたように痛み、次いで凍り付く。

慎一はロープを掴んだまま尻餅をついた。

「聡美！聡美！」

崖から身を乗り出すようにして叫んでも、返事は無く、霧が濃く巻き始めた崖下は、視界ゼロで何も見えない。

「聡美……」

しばらく呆然と登山道に座りこんでいた彼は、やがて、ゆっくりと立ち上がった。

それからの、彼の行動は、傍目に見れば見事なものだった。

ザックを他の登山客の邪魔にならぬ場所に置いて、助けを呼びに山小屋に戻る。

冷静に状況を主人に報告し、涸沢からの救助隊を待った。

天候不良のため、ヘリコプターによる救助は望めない。

代わりに、救助のプロフェッショナル七名が、唐沢から北穂に登って来た。

彼らが、ロープを使って遺体を引き揚げたのは、聡美が霧へ姿を消してから六時間後のことだった。

予想外に時間がかかったのは、崖下に遺体が見あたらなかったからだ。

搜索の結果、聡美は、崖の途中から突き出した岩に掛かっていた。

救助員の一人が思わず感嘆したほど、聡美の死に顔は美しかった。

後で知ったことだが、岩場での滑落死体は、たいていの場合、酷い状態であるらしい。

「こんなことを言っても慰めにはならないでしょうが、奥さんはお苦しみにならなかったと思いますよ」

救助隊の隊長が言った。

毎年、何人もの滑落者の家族に対して同様のことを言っているため慣れているのだろう。

事務的な口調で続ける。

「詳しいことは後でお聞きになるでしょうが、滑落してすぐに崖から出ていく岩にぶつかられたようです。その際に、心臓を強打されたのが直接の死因です」

事故の原因の方は、輪にしたロープの結び目がほどけたことだった。

それを聞きながら、冷たくなった妻の手を握り続ける佐分利慎一の表情は冷静だった。

だが、その時、すでに彼の精神は平衡を失い始めていたのだった。

聡美が死ぬまで、慎一は一流の企業戦士だった。

今日よりは明日、明日よりは明後日と、日々、自己のキャリア・アップを目指して、文字通り「戦って」いたのだ。

数年前まで、現在のように、実力主義の人事が行われることは少なかった。

だから、年功序列の社内において、慎一が出世の障害になりそうな同僚や上司を、かなり悪どい手口を使って追い落としたことも一度や二度ではなかった。

大企業の中堅クラスの管理職ともなれば、叩けばいくらでも埃は出る。

横領、リベート、女……

それらの情報を入手し、利用して社内派閥に食い込み、揺さぶり、順列を乱そうとした。

社内の反対勢力に情報を流して、直属の上司を更迭させた事もあった。

友人も売った。

なぜ、そうまでして上を目指すのか。

劣等感だ。

彼を知る者は、佐分利慎一が劣等感を持っていると聞けば、おそらく驚愕するだろう。

彼ほど自信にあふれ、確信に満ちた社員はいなかったからだ。

だが、慎一自信は、若い頃の挫折による劣等感が、自分を突き動かしていることに気づいていた。

もうこれで良いだろう、俺は充分やった、と思った瞬間、背後の暗闇から襲いかかる夜行性の獣のように、劣等感による恐怖が襲ってくるのだ。

「駄目だ。まだ駄目だ……」

それから逃れるには、前に走るしかなかった。

佐分利慎一は、東大受験に五度失敗した。

生まれつきの理系である彼は、数学と物理化学には絶大な自信を持っていたのだが、社会と国語だけは苦手で、何年受験勉強しても、成績が上がらなかった。

得意科目ばかりで受験できる私学選べば合格するのは分かっていた。

だが、彼は、どうしても東大に入学しなかったのだ。

五浪して、結局、私立の慶教大学工学部に入学せざるを得なかった。

両親や友人は優しく彼を見守ったが、逆にそうされることで、受験における失敗は、慎一の心に暗い影を落とすようになった。

大学に入学した彼を待っていたのは、浪人時代より激しい孤独感だった。大学での彼は孤立していた。

同級生のほとんどは彼より年下であったし、その大部分は付属高校からの進学者で、受験と言えば、小学校の時に経験したきりの、苦労知らずのぼっちゃん達だった。

年を取ってからの五歳違いと、若い頃のそれとでは、内容に格段の違いがある。

明らかに精神年齢が上の彼が、同級生ということで友人人口調で話をしなければならぬのも苦痛だった。

サークルを通じて付き合いだした女も、卒業間際になって去っていた。

彼が五歳年上で、工学卒業者のエリートコース、大手電気メーカーに就職できる可能性がほとんどないと知ったからだ。

もちろん、そればかりが原因では無かったのだろうが、彼はそう信じた。修士に進めば良かったのかもしれないが、彼は、研究に明け暮れるより、現場で働きたいと思っていたのだ。

いざ、就職活動を始めてみると、不況ということもあって、やはり佐分利を受け入れてくれる会社は皆無だった。

結局、教授に頼み込んで入社したのは、大手電機メーカー全額出資の新設子会社だった。

できたばかりの会社で、社員の半分が本社からの出向社員だ。

彼には、ある思惑があったのだ。

入社後、半年を経ずして、慎一は部長の桑谷に目をつけた。

桑谷は、同族経営の新興成金と陰口をたたかれながらも、一流企業にのし上がった本社常務の息子だった。

とりあえず、外の水を飲んで来いということで、慎一の会社の部長として出向しているが、数年で本社に戻されるのは分かっていた。

そういう境遇の社員は、他に数人いたが、桑谷に慎一が目つけたのは、彼が並はずれた野心家だったからだ。

米国でMBAを取得した桑谷は、自身の力で旧弊な企業を変えることができる、と信じていた。

今は力を蓄えて、やがては、頭の固い重役陣から権力を奪い取ってやる、そう思っていたのだった。

桑谷は使える。そう慎一は思った。桑谷は自信家だ。自信家は、その自信ゆえに他者の術中に陥りやすい。

慎一は桑谷の性癖を調べ始め、彼が望む通りに行動し、望むものを彼に与えた。

仕事の成果、酒宴、そして女。

それこそ献身的な尽くし方だった。

やがて、社内で、慎一は自他共に認める桑谷の右腕と目されるようになって、

二年後、本社に戻る桑谷に従って、異例の本社栄転をする佐分利の姿があった。

本社に移ってから慎一の密謀は続いた。

桑谷のため、自分のため、数多くの同僚や上司を失脚させた。

良心は痛まなかった。のほほんと、今日と同じ明日が来ると闇雲に信じて暮らしている奴らが悪いのだ。

陥れた連中から、どう思われても構わなかった。

ただ一人、志野 皓をのぞいては。

慎一と志野は幼なじみだ。

小学校卒業まで一緒によく遊んだものだった。

何かあると、気の弱い志野を佐分利は守ってやった。

親友だと思っていた。

いや、それ以上だ。志野のことは、弟のように思っていたのだった。

そうでありながら、佐分利は志野を罵にかけた。

慎一が、十六年ぶりに志野と会ったのは、本社栄転を果たして、三ヶ月が過ぎる頃だった。

社員食堂で、一人、定食を載せたトレイを持ってレジに並んでいると、ぼん、と背中を叩く者があった。

振り返ると、志野の浅黒い顔が笑っていた。長身の慎一とほとんど目の高さは変わらない。

四百五十円の定食を共に食べながら、志野と慎一は、積もる話をした。

「噂は聞いているぜ。桑谷さんが、すごく斬れる右腕を連れて帰ってきたって。名前を聞いてびっくりさ、まあ、君なら当たり前だな」

「まさか、お前がこの会社にいたとはなあ」

意外でもあり、ショックだったのは、志野が、東大の工学部を卒業していたことだった。

入社七年を経て本社の中堅社員となっている志野に、食事中も、多くの社員が黙礼をして通り過ぎて行く。

そのことは佐分利の自尊心をいたく傷つけた。

笑顔で、志野の言葉に相づちを打ちながらも、内心で慎一は歯ぎしりをしていた。

幼い頃のスタートは同じで、能力は俺の方があるのに、なぜ俺が奴の踵を見ながら歩かねばならないのだ？

その後、同僚が先輩扱いする志野が、社内で気易く声を掛けてくるのにも辟易した。志野が気易く声を掛けるたび、彼らの目に笑いと嘲りの度合いが増すように慎一には感じられたのだった。

また、志野に対する返答も、佐分利自身に葛藤をもたらせた。友人として

返事をすべきか、後輩として敬語を使うべきなのか……。

佐分利は予備校でよく言われた笑い話を思い出した。

「予備校で先輩と呼ぶんじゃない！」

さすがの佐分利も、志野に悪意があるとは思わなかったが、志野は、その存在自体が佐分利にとって靴に入り込んだ小石のようなものだった。

そこにあるだけで、違和感を感じさせ、傷つきやすい肉を削り血を流させる。

志野が、行きつけのバーの女を通じて、ライバル企業に機密をリークしたとして糾弾され、結果的に辞職に追い込まれたのは、慎一が本社に転属してから一年目のことだった。

今でも慎一は志野のことを考えると、胸の一部分が落ち着かなくなる。

それは、わずかに残った良心の疼きかも知れない。

慎一は、これまで多くのライバルを蹴落としたが、それは、直接自分の進路に立ちふさがる者だけだった。

それら敗者に対して、慎一は、競争社会の原則を忘れ、安穩と会社員をしている者が悪い、と思つて、何ら良心の呵責は感じなかった。

だが志野だけは違った。志野は同期入社でもなく、職場も彼とは直接関係のない技術畑だった。

畏に落とす必要などまるで無かったのだ。

しかも、奇妙なことに、そんな仕打ちをしながらも、佐分利は、心を許せる親友は幼なじみの志野だけだと感じていたのだ。

すでに、我が身の不運が慎一の画策によるものであると志野が気づき、彼を憎んでいることを知っているにも関わらず……

聡美と結婚したのは、他でもない、彼女が営業部長、香田の娘だったからだ。

愛情など最初から問題にはしていなかった。

少なくとも、彼はそう思いこんでいた。

だが、聡美を亡くしてから、その考えが間違っていた事を彼は思い知った。

いつしか、彼は、繊細可憐な聡美を愛していたのだ。

彼なりの冷たく身勝手な激しい情熱で。

悲しいことに、聡美はそれを知っていた。

その上で彼を愛してくれたのだ。

妻が残した日記は、慎一への愛といたわりの言葉に満ちていた。

彼女は、死ぬ直前まで彼を愛し、信じていたのだ。

慎一は、この春、念願の事業部長に昇進した。

異例の若さだった。

佐分利慎一は、得意の絶頂にあつて、聡美を失ったのだ。

妻の死後、慎一は、二人の思い出から逃げるように、都内の一戸建ての邸宅から、着の身着のままワンルームマンションに引っ越してきた。

そして、半分死んだような生活を続けている。

仕事は、見かけ上は、そつなくこなしていたが、以前のような鋭さはもうなかった。

佐分利は駄目になった、と周りから囁かれ、このままでは、来年の更迭は避けられないと噂されている。

夜も更けた頃、電話が鳴った。

慎一は動かない。

このワンルーム・マンションに越してから、部屋にいる時は、必ず留守番電話にしてある。

話をするのは仕事だけで充分だ。家にいる時まで、他人と話をしたくなか

った。

五度目の呼び出しがあつて、ピーーと電話が音を発し、自動的に留守番電話に切り替わった。

プリセットされたメッセージを流し出す。

「ただいま。留守にしています。ご用件のある方は……」

メッセージの後、鼻にかかった女の声が響いた。

「慎一さん、お出かけなの。休みの度にどこに出かけているのかしら……」

それを聞いて、佐分利の表情が歪んだ。

社長令嬢の咲恵だ。

彼女は、八年前、留学先で突然、英国人と結婚し皆を驚かせたが、半年も経たないうちに離婚して、また皆を驚かせた激情肌のお嬢様だ。

今年で二十九になる。

彼女は、慎一のタイプではなかった。

だが、聡美が死ぬまでは、女性問題でしくじってデトロイト支社に再び出向させられた桑谷が変わって、咲恵を出世に利用しようと、接近を計っていたのだ。

だが、今はもう、このけばけばしく飾り立てた女には、何の興味も無い。

自然、咲恵に対する態度も冷たくなった。

ところが、不思議なもので、ご機嫌とりをしていた頃は、慎一を冷たくあしらっていた咲恵も、彼が冷淡になると逆に彼を誘おうとやつきになり始めた。

慎一の冷たさが好ましい、と公言して憚らない。

おかげで、慎一の社内での評判はさらに下落した。

最近では、社内であうと、部下の前でさえ、おおっぴらに誘いをかけられるようになった。

もっとも、そんなことは、今の慎一にとっては、どうでも良いことだった。

社内での評判など、くそくらえだ。

また電話が鳴った。

今度は、メッセージの終了を待たずに相手が話し出した。くぐもった声だ。

「佐分利。どうして出ない。いるのは分かってるんだぜ」
聞いたことの無い男の声だった。

「まあいい。贈り物は気に入ってもらったかな……また連絡する」
電話が切れても、慎一の表情は変わらなかった。

電話まで近づき、通話を再生してみた。番号表示を見たが非通知だ。贈り物、という言葉で思い出して、慎一は、ベッドの上の包みを手を取った。

包みに貼られた伝票を見ると、時間指定になっている。差出人は、ワールドカンパニーという会社だ。

しばらくそれを眺めたあとで、慎一は、ゆつくりとした動作で包装をほどいた。

中から現れたのは、変哲もない段ボール製の箱だった。
蓋を開ける。

「……」

慎一の口が大きく開かれた。

声にならない呻き声が漏れる。

それは、苦悩と恐怖の入り交じった叫びだった。

目は飛び出さんばかりに見開かれ、部屋の空気が無くなったように、口をパクパクさせ、喉が木枯らしめいた音を立てたてていた。

ひどいノックの音だった。

薄いベニヤの扉にはまったガラスが割れそうな勢いだ。

最初は、有佳だと思った。

だが、執拗にドアを叩く音に、別人だと気づき、

「はいはい」と返事をして布団から抜け出した。

そんなに叩いたら、家賃三万二千円の安アパートが潰れちまうよ、と呟きながら鍵を開ける。

だが、ノブに手をかける直前、ドアは外から乱暴に開けられた。

レジメンタル・ストライプの細身のネクタイが、目に飛び込んで来た。

と、同時に突き飛ばされ天地が逆になる。

呻き声を上げる間もなく、今度は胸ぐらをつかまれて引き起こされた。

「志野 皓だな」

どうやら、相手は先に人を突き飛ばしておいてから、人物の確認をする手合いらしい。

皓をぶら下げているのは大男だった。どうりで扉を開けた時、ネクタイしか目に入らなかったわけだ。

「何者だ？」

逆に質問すると、それには答えず、大男と共にやって来ていた痩せた男が、部屋に土足のまま上がり込んで家捜しを始めた。

「正直に答えれば手荒なまねはしない」

「……」

「どこに隠した？」

「何の話だ？」

家捜しを始めた男は、部屋中に散らばる電子部品と基盤やコード類、それにコンピュータの敷に驚いたようだった。

一般的に、六畳一間のアパートに、八台のコンピュータは多すぎるだろう。

実際は、ノート型のものを加えると、志野の部屋にはパソコンが十五台ある。

もつとも、逆に言うとなんだけがこの部屋の家財道具一式だった。

本は、ネットワーク関連の専門書が八冊あるだけだし、衣服はそれ以下の数しかない。調理道具は、鍋が二つと登山ナイフだけだ。

「こいつ、一体どういう生活をしてやがるんだ？コンピュータ・オタクか？」

皓は肩をすくめて見せた。

途端に、ごつい拳が鳩尾に入る。

呼吸が止まった。

しばらく息ができない。

皓の目から涙がこぼれた。

「テレビの中に隠しているのかも知れませんが」

「よし、探せ」

痩せた男は、ディスプレイを潰し始めた。靴の爪先で、ディスプレイを蹴りつける。

一般家庭で最後に残った真空管であるブラウン管は、衝撃を受けて、小気味よい爆発音を発して破裂した。

ガラスが飛び、プラスチックの破片が散った。

コンピュータ本体は、ミニタワー型で、中がいじりやすいようにカバーはすべて取り去っているために、何も隠していないのはすぐわかる。

そのおかげで、コンピュータは破壊を免れた。

皓は時計を盗み見た

午後二時。ほっと息を吐く。

この時間なら、有佳は仕事に行っているからアパートにはいないはずだ。幸いだった。

有佳が、もし、この現場に居合わせれば、たちまち男達に噛みついたに違

いない。

だが、今日は水曜日だから、三時には帰ってくるだろう。

それまでに、この男達を追い払わなければならない。

皓は覚悟を決めた。

「何を探しているか知らないが、金なんかはないよ。金以外を探しているなら、きっと誤解だ」

「佐分利慎一を知っているな？」

突然の質問だった。

一瞬、志野の呼吸が止まる。

最近はその名を思い出すことも少なくなっていたが、やはり突然聞くとショックが大きい。

「ほう、面白い顔になったな？俺達となじみの深い顔だ」

大男が笑顔を見せた。いやらしい顔だ。

「憎しみ、怒り、そして羨望……その顔になってくれると俺達とうまくいく」
皓はうんざりした。どうやら俺は、まだあの事件を克服できていないらしい。

と、同時に、それをこんな男に指摘された自分に腹が立ってきた。

「佐分利がどうしたっていうんだ？」

「消えたのさ」

「消えた……なぜ？」

「と、聞くのはおかしいな。原因は、お前が良く知っているはずだ」

「俺が？」

「しらばっくれるなよ。お前が佐分利と連絡を取り合っているのは分かっているんだ」

痩せた男が、引き出しの中身をぶちまけながら言った。

「証拠は？どうしてそんなことを言うんだ」

「佐分利の机の上のメモに、お前の名前と電話番号が書いてあったんだ」

「知らない」

もう一発拳がきた。が、今度は体をひねり、腹筋をうまく調節してダメー
ジを最小にできた。

大男は、驚いた顔になり、

「結構いい筋肉してるじゃねえか。ただのコンピュータ・オタクじゃなさそ
うだな」

そう言って、さつきより、ちよつとましな笑顔を見せた。

「本当に失踪したのか？殺されたんじゃないのか？」

「なぜ、そう思う？」

「佐分利なら、殺されてもおかしくない……」

皓は呟くように言った。

「なんだと……」

「奴の経歴を知らないのか？どうやって今の地位に昇ったか？」

少し調べれば分かるはずだ。大企業部長の革張り椅子の肘掛けを掴む奴の
手が、どれほど汚れているか。

「お前との関係は？」

「俺か？ずっと前に、奴の罠に落ちた哀れな生贄さ……ところで」

「なんだ」

「煙草はやめさせてくれ。ヤニはコンピュータに悪い」

痩せた男が、引き出しをひっくり返しながら、くわえ煙草にジッポで火を
つけようとしていた。

「ふざけるなよ」

男は、引き出しの底を叩く作業をやめて、煙を深く吸い込むと、長々と皓
に吹きかけた。

「ふざけてなんかいない。そのために、俺も煙草はやめたんだ」

「おい、三好」

大男に眼で合図され、三好と呼ばれた男は、舌打ちをすると、煙草を机でもみ消して廊下へはじき飛ばした。

これまで以上に、めっちゃくちゃに部屋を荒らし始める。

コンピュータがひっくり返り、埃が舞い上がった。

皓の胃の上のしこりが大きくなった。この調子では、マシンがすべて壊されてしまう。

皓の拳が硬く握りしめられた時、三好が、ふう、と大きく溜息をついて言った。

「無いようですぜ」

「何を探している？」

怒りを飲み込んで、静かな声で皓は尋ねた。

「資料だ。佐分利から預かっているはずだろう」

馬鹿でかい手が皓の顎を握り、左右に揺さぶった。

「それに奴の居場所だ」

佐分利の居場所？そう言われても訳が分からなかった。ここ数日どころか、何年も佐分利と話などした事はない。

なぜ、奴の机の上に俺の名前が？

狐につままれたような気持ちだった。

それが表情に表れたのか、男の態度が少し軟化した。

「本当に知らないのか？」

「もうちょっと詳しいことを教えてくれ」

大男は、しばらく黙っていたが、机の上のICやチップ抵抗を乱暴に払い落とすと、巨大な尻をそこに乗せて話し始めた。

「俺達は浅野グループの者だ」

その名前なら知っていた。

最近、インターネット上のニュースでもよく聞く名前だ。

男は話し始めた。

浅野グループは、土木請負や不動産の売買から始めて、今や居酒屋チェーンやコンビニ・チェーン事業にまで手広く事業を広げつつある優良企業だ。

多角的に展開しつつある事業を統合するために、二年前から佐分利の勤める会社に事業のネットワーク化を依頼していた。

それは単なる書類の電子化では無かった。

規模も相当大きくなったため、異例ではあったが、部長の佐分利が総責任者となったのだった。

「オヤジは、この業界で俺達が一番進んでいる、と、ご機嫌だったが、俺自身は何となく気に入らなかった。コンピュータってのはな。やっぱり、紙と鉛筆とハンコの方が信用できる」

この業界とは、ヤのつく自由業のことなのだろう。

えらい世の中になったものだ。

大企業のみならず、暴力団までもが、書類の電子化に血道を上げていると

は……

皓は腹の中で唸った。

「異常に気がついたのは、週明けの月曜日のことだ。預金口座から、居酒屋チェーンの資金の一部である二五〇万が突然無くなってしまいやがったんだ」

銀行に調べさせると、金は様々な口座を転々とした挙げ句、最終的な振り込みは分からなくなっていたという。

「だが今日になって、最終的な振込先が分かった、と連絡があった。巧妙に隠されていたが、わずかな痕跡から何とか突き止めたいらしい」

皓は頷いた。

銀行でも企業でも政府機関でも、ネットワークでアクセスすると、必ず何

らかの痕跡、ログが残る。

「その振り込み先が、佐分利慎一の口座だった。奴はネットワーク化の責任者だ。会社のデータを入手できる立場にある。俺達は、すぐに会社に連絡をとった。だが、奴は月曜から会社を無断欠勤しているらしい。それで、奴のマンションに出かけたが……」

男は手を空中でぱっと広げ、

「奴の部屋は、もぬけの殻だった。誰もいやがらない。調べてみると、奴を最後に見かけたのは宅配便の配達人だった。日曜のことだ。部屋の様子は、ちよつと外出している、という雰囲気だった。どこかに逃げようとして、部屋を出た感じじゃない。俺は、たくさんの夜逃げのケースを知っているが、そのどれとも違っていたからな」

大男は懽然とした表情で言った。

「警察に任せれば良いじゃないか」

「もちろん、そうさ。金だけの問題ならそうする。いや、二五〇万程度の金ならくれてやっても良い。だが、問題は金じゃないんだ。奴が金を自由に引きだせるということは、ウチのパスワードやIDを手に行っているということだ。つまり、奴は、ウチのいろんな情報に簡単にアクセスできるってことだ。もう、ヤバイネタを掴んでいると考えて間違いない。それがサツにばれるとまずい。迷惑をかける方々がたくさんいるからな」

それでわかった。

さつきから、この二人は、佐分利の行き先を示したメモや書類、預かった資料などを探していたに違いない。

皓はあきれた。ボスは電子化に熱心でも、その部下は何も分かっていない。そういった『情報』は、もし存在するなら、フロッピー・ディスクやMO、CD-R、あるいはコンピュータ内のハード・ディスクに入っている。

ディスプレイを壊し、引き出しをひっくり返しても見つかるわけが無い。

もちろん、そのことを教えるつもりはなかったが。

「奇妙だったのは、ベッドの上に置かれていた箱の中身だった。宅配便で届けられたに違いないが、何を意味するかわからねえ。こいつだ」

男はポケットから小箱を取り出すと蓋を開けた。

中には、青い紐が入っていた。真ん中に結び目がある。

「状況から判断すると、こいつを眼にして、佐分利は部屋を飛び出したように見える」

「ボウライン・ノットだな」

「何だ？」

「もやい結びさ」

その時、威風堂々のメロデイが、どこかで鳴り出した。

痩せた男が身をくねるようにポケットから携帯電話を取り出す。

しばらく受け答えをして、大男に電話を渡した。

男は、黙って相手の話を聞いていたが、分かった、すぐ行く、と言って電話を切った。

皓の腕を掴む。

「いいか、今、俺たちは、奴とつるんで金を盗んだ可能性のある者を洗い出し、一人ずつ調べにかかっている。長いリストだ。だが、そのリストの最前列にいるのはお前だ。忘れるなよ」

そう言って、皓を乱暴に突き放すと、壁のカレンダーの隅を引きちぎり、内ポケットから出した。ペンで電話番号を走り書きした。

「何か思い出したら、ここに連絡しろ」

そう言って、紙片を差し出す。

皓が受け取らないでいると、寝間着の胸ポケットに押し込んで言った。

「また来るぜ。すぐにな……」

男たちが出て行って、しばらくして狩野有佳が顔を出した。

「肉まん買って来たけど、一緒に食べる？」

「いま帰ったのかい？」

「そう。水曜日だもの」

有佳は部屋の異常に気づいたようだった。

可愛い眉を心持ちしかめる。

「どうしたの？」

いいながら部屋に上がり込もうとする。

「ちよっと待った。ディスプレイが割れてガラスの破片だらけだ。裸足で上がらない方がいい」

「でも、このままだったら、あなただって危ないじゃない。ちよっと私の部屋に来て」

有佳は、隣の自分の部屋に皓を引っ張っていった。

廊下には、向かいの部屋の住人、リン・イエンが立っていた。

心配そうな顔をしている。

それで、水曜日が、リンの勤めている食堂の定休日だったことを思い出した。

リンは、ベトナム人だったが、不法入国しているために、中国人、林海鈴と名乗っていた。警戒心から容易にうち解けなかったが、今は隣人として暗とも親交があり、特に有佳と仲が良かった。

先ほどからの騒ぎには気がついていたはずだが、恐ろしくて見に来られなかったのだろう。

今は、有佳の声が聞こえたから見に来たに違いない。

もう二十五歳になるはずだが、見た目は、十六、七にしか見えないあどけない顔の娘だ。

手を胸の前で組み、小さく震えている。それを見て、皓はリンの屈託なく

笑う顔を知らないことに気づいた。記憶の中のリンは、いつも何かに怯えた顔をしている。

それゆえ、昼間から部屋にごろごろして、近隣に不安を与えている皓としては、なるべく世間にさらなる刺激を与えたくなかった。

今度の件で、また隣人達に不信感を与えてしまったに違いない。

「ダイジョーブ？」

不安げに、カタコトの日本語で尋ねる。

「うん。大丈夫みたい。ありがとう」

そう答え、有佳は、皓を自分の部屋に押し込んだ。

皓より遙かに年下の有佳は、自ら皓の世話係をもって任じているところが
ある。

もともと、地に足のついた生活力という面では、皓はからつきし無力であったから、有佳が世話を焼くのも仕方がないのかもしれないなかった。

皓の部屋と違って、有佳の部屋はきれいに片づいていた。

入った途端に、若い娘の甘い匂いが皓を圧倒する。

有佳が引越して来て、隣人として付き合いだしてから三ヶ月経つが、部屋に入るのは初めてのことだった。

「ここに座って、お茶でも飲んでいて！」

慌てた時は、まず茶を一服。

それが、祖母から教わった生活の知恵だと有佳から聞いた事がある。

有佳は、しゃかしゃかと手早くお茶を点てると、有無を言わせぬ調子で茶碗を持たせ、部屋を出ていった。

壁越しに、掃除機の音が聞こえ出す。

皓は手にした茶碗を見下ろした。苦みのある緑の液体が輪にした手の中で揺れている。

自分では落ち着いていたつもりだが、手の震えを見ると、かなり興奮して

いたらしい。

老人の知恵は、理屈以上の効果があることが多い。

実際、皓はふつふつと泡立つような血のたぎりが、茶を飲む撃うち、ゆっくりと収まっていくのを感じた。作法は知らぬが、茶の味は嫌いではない。飲みながら考える。

どう考えても佐分利の行動は奇妙だ。二五〇万程度の金を奪って逃げる理由がない。奴は、金には困っていなかったはずだ……

飲み終わって、しばらくその余韻に浸っていると、有佳が帰ってきた。

「もう大丈夫よ」

「ありがとう」

「でも、テレビ壊れちゃったわね」

「ディスプレイかい？。大丈夫さ、CRTの方は全部割られたけど、液晶ディスプレイが一つ無事なはずだ。一つ生きてりゃ充分さ」

札を言って、部屋に戻ろうとすると、

「もう一服お茶をいかが？私も一緒に飲みたいの。喉が乾いちゃったから」

有佳が皓の肩を優しく押さえた。

鮮やかな手際で茶を点てる有佳を見て、皓は尋ねた。

「いくつの時からお茶を習っているんだい」

「八つ」

ちよつと恥ずかしそうに付け加える。

「お姉ちゃんが、おばあちゃんから習っているのを見て、私もって……」

そう言いながら、きれいに泡だった茶から茶筌を引き上げた。美しい泡の山が表面に盛り上がる。

ふと、有佳が眼を上げた。

まっすぐに皓を見つめる。

反射的に、皓は瞳を反らした。

有佳の瞳は真っ直すぎて、こちらの考えを何もかも見透かされそうで恐ろしい。

皓は、有佳の澄んだ瞳を見る度に泣きたくなる。

いい歳をしてみつともないと思うが、俺の眼は、有佳の瞳ほど澄んでいないに違いない、そう思い知らされるからだ。

こんな時、二十一歳の有佳と三十六歳の自分との間に横たわる距離は、歳の差ではなく、積に近いような気がするのだ。

「お茶は習ったけど、おばあちゃんからよく叱られたわ。あんたは、お姉ちゃんと違って、言葉遣いになってないって」

皓は、有佳が祖母以外の家族の話をするのが始めてだったことに気づいた。

「お姉さんがいたのか」

「ええ。歳は離れてたけど、仲は良かったの」

「最近も会ってる？」

「もちろんよ。毎日ここでね」

指さす先に、位牌があった。

「そうだったのか……」

皓は黙った。有佳にも辛い事がたくさんあったに違いない。

今の有佳からそれを伺い知ることはできないが……

「嬉しいわ。皓さんは謝らないから。こんな時、謝る男って嫌い」

言って有佳は唇を咬んだ。一瞬、泣きだすのではないかと思ったが、すぐに有佳は笑顔を見せる。

「仏壇もなくて、お姉ちゃんには申し訳ないんだけど」

言われてみて、改めて部屋を見回しすと、有佳の部屋は片づいているというより、自分の部屋と同じくらい何も無い部屋だった。

随所に、女の子らしい装飾は見られるものの、全体の道具の少なさは、こ

の年頃の女性にしては驚くべきものだった。

食堂でアルバイトをしているリン・イエンの部屋の方が物がたくさんある。

しばらく二人は黙り込んだ。

沈黙を破るように有佳が言った。

「でも、どうしてあんなことになったの？」

皓は、突然、男達が現れたことを手短かに語った。

「佐分利慎一が行方不明！ほんと？」

有佳は、驚いたように口を丸く開けた。子供みtainな顔になる。

彼女には、これまでの佐分利との経緯を簡単に話してあった。

「それが、どうも妙なんだ」

皓は、佐分利が、届けられた箱の中のロープの結び目を見て部屋を飛び出したらしいことを話した。

「何か意味があるのかしら」

形の良い眉をひそめて有佳が言った。

「それで、どうするの？」

「調べるさ。自分にできる範囲で」

「警察に任せればいいじゃない」

皓は首を振った。

「奴らは警察に届ける気はないようだ。佐分利がどれくらい自分達の秘密を知っているか聞き出すまではね。それまで、俺を放っておいてくれるとは思えない。だったら自分で真実を探し出すさ」

しばらくして、皓は部屋に戻った。有佳がついてくる。

薄いドアを開けた途端、冷気が噴出した。

気持ちの準備をしていなかったため、水を頭からかけられたようなショックを受ける。空気が青みがかって見えるほどの冷気だった。

「ごめんなさい。冷房が入っていたけど、リモコンがどこにあるか分からなかったの。すぐに言おうと思ったんだけど忘れちゃってた」

「いいさ。どうせ、すぐに部屋を冷やさないといけないから」

部屋は完全に冷えきっていた。金属部分に触ると手にくっつきそうだ。

この部屋の大形冷房機は、温度設定は無視して最強にしてある。

コンピュータは激しく発熱するうえ、熱を嫌うからだ。

だから、夏はもちろん、冬でさえ、冷房を入れているのだ。

季節は秋になり、過ごしやすい気温になってはいたが、十台近いマシンを同時に立ち上げれば、すぐに部屋の温度は上昇する。

有佳は、掃除機はかけたものの、部屋にもにほとんど手をつけてはいなかった。皓が、持ち物に触られるのが嫌いなことを知っているからだ。

皓は、破壊を免れた液晶ディスプレイと接続用のマシンを手際よくつないだ。

サーバー用のマシンを立ち上げ、ネットワークにアクセスする。

安アパートだが、一応データ通信の専用線は引き込んであるのだ。

「まず、奴がどんなプロジェクトに関わっていたか調べてみよう」

「そんなことができるの？」

有佳は眼をまるくした。

今まで、有佳には、自分の職業をプログラムの開発と言っていたから、有佳はゲームのプログラムでも作っていると思っていたのだろう。

嘘ではない。

事情があつて、会社を辞めてからも、皓の技術を惜しんで個人的な依頼をしてくるソフトメーカーは多いからだ。

現に、今も、いくつか工数の小さいサブルーチンの製作を依頼されている。

ソフトの世界には、高いスキル（技術）を持つ技術者が少ない。

プログラマとは名ばかりの、既存のバグだらけのサブルーチンをつなぎあ

わせて、小汚く巨大なプログラムを作る者がほとんどだ。

美しくわかりやすいプログラム、その価値を知る者が日本に何人いることか……

かつて、こういうことがあった。

西暦二千年問題が騒がれた時、ある会社が船舶の予約ソフトに対処したものの、テストをすると、動作不良になった。

その「二千年問題対応会社」が行った対処というのを知った時、皓は開いた口がふさがらなかった。

英語で書かれたプログラムを、思いつく限りの「日付に関連した英単語」で検索して、それが使われている周辺だけに、その場しのぎの変更を行っていたのだ。

そのソフトが誤作動を起こしたのは、日付と関連の無い英単語が、日付の変数として使われていたからだった。

日付の変数に、日付と関係の無い英単語を使ったプログラマもいい加減なら、それに思い至らない「対応会社」も情けない。

自分なら、日付を多面的に定義して、それに合致する単語を自動的に抜き出すプログラムを作り、予約ソフトをチェックさせる。

多めに怪しい単語を抜き出して、人の眼で絞り込めば確実だ。

そういったチェック・ソフトすら作れない技術者を会社は雇わざるを得ないのだ。

インターネットのように、存在するデータが膨大な世界では、今やほとんどが機械任せだ。

昔は自己登録制だった検索用サイト、ポータルサイトと呼ばれる、のキーワードも、今はプログラムで各ホームページを探らせて、勝手に集めるようになっていくものがほとんどだ。

人間による手作業など多寡が知れているのだ。

皓が、試しに作った小規模なチェック・プログラムは、口づてで評判を呼び、各社に好評をもつて迎えられた。

もつとも、そういったソフトの開発は副業に過ぎない。

皓の本業は、企業に頼まれてネットのセキュリティ・チェックをすることだ。

検査を請け負った会社から依頼されて、皓が外部からアタックをかけるのだ。

9段階のアタックレベルで、レベル8で侵入できなければそのシステムは合格だ。

それ以下で侵入可能だと、皓が対策方法を教えるのだ。

つまり、アタックレベル8で侵入できなければ、そのシステムのセキュリティレベルは8ということだ。

ある時、某大手光学機器の部長が、どうしてセキュリティ・レベルを9にしないのだ、と尋ねたことがある。

皓は説明に困って頭をかいた。

実のところ、レベル9のアタックに耐えるシステムというのは、今のところ存在しないのだ。

限りなくセキュリティ・レベルが9に近い米国国防総省ですら、クラッカーの侵入を許すほどなのだから。

「人間が作ったシステムだから、必ず、どこかに穴、セキュリティー・ホールがあるのです。でもご安心ください。レベル8以上のシステムに侵入できるのは、世界でも数人だけです」

その時、皓はそう答えたのだった。

皓はこの本業に満足していた。

社会的な存在意義もある。

社会正義も守ることができる。

だが……

「俺達となじみ深い顔だ」

突然、男の言葉が蘇った。

皓は思った。

自分は、気づかぬうちに、佐分利達のような大会社のシステムに合法的に侵入することで、歪んだ復讐心を満足させていたのではないか……

だから、こんな窮乏生活にも耐えていられるのではないか？

有佳には言っていないが、プログラムの開発とクラッキング・チェックで、皓の年収は一二〇〇万近くある。

だが、生活は苦しい。

時として有佳に晩飯を恵んでもらわねばならないことすらある。

世に、ハッカーと言われる者の生活は、そのほとんどが火の車だ。

新しい設備投資に金が掛かりすぎて、生活が立ち行かないのだ。

金が入れば、新しい機械マシンが欲しくなる。

ひどいときは三日毎にマシンを入れ替えることも珍しくない。

以前は、秋葉原まで出かけて買っていたので、それほど頻繁に買い換えはできなかったし、パーツの単価も高かった。

だが、今は、宅配便で下取りに出し、差分の金を払ってインターネット経由でマシンを買うことができるから外出しなくてすむ。

その上、CPUやメモリ、ハードディスクなどの価格も釣瓶落として下がってきているから、交換の頻度はさらに高くなっている。

もつとも、現在の皓の最大の出費は、今も部屋を鳥肌が立つほど冷却し続ける大型のエアコンの設置費と電気代だった。

電気など、工事をして、わざわざ大容量の三相交流を引き込んであるほどだ。

高速のコンピュータを使う時、問題になるのは発熱と電気容量だ。特に夏の温度対策は重要だ。スーパー・コンピュータのように、液体ヘリウムで冷却するところまではいかないが、皓の持つマシンの中で、最速のものは、オーバークロックで動くデュアルCPUから放出される大量の熱を吸い取るために、手製の水冷装置が取り付けられている。コンピュータの心臓部を水が循環しているのだ。

そのマシンは、先ほどの家捜しのショックで水が漏れている可能性があるので、今のところ、性能は少し落ちるが、通常空冷マシンを起動させることにする。

その姿を、感心したように見ていた有佳が言った。

「皓さんて、ハッカーみたい」

皓は頷いた。コンピュータが苦手な有佳も、その言葉は知っているらしい。若い頃は、ハッカーとクラッカーの違いを声高に論じたものだが、最近はどうでもよくなってきた。自分の中の主義の問題だ。

だが、有佳には一応の違いを知って欲しかった。

「ハッキングというより、これからやるのは、どちらかというと、クラッキングに近いんだ」

「クラッキング？」

「伝説のハッカー、ケビン・ミトニックという男がいる。彼は、アメリカ国防総省の導入に成功した最強のハッカーだ。だが、人々が、彼を伝説のハッカーと呼ぶようになったのは、後に彼の部屋で見つけた、数限りない使用可能なクレジットカードの番号とプロバイダや企業などのパスワードのせいだった」

有佳はじっと皓を見つめている。

「彼は、その気になれば、クレジットカードを悪用して大金を掴むこともで

きただろう。あるいは、企業のサーバを乗っ取ることもできたかも知れない。もっとわかりやすく言うと、企業秘密をライバル企業に売り飛ばすこともできたんだ。だが、彼はそうしなかった」

「つまり、それがハッカー？悪いことをする人がクラッカーなの？」

「まあ、そうだな」

ちよつと違うと思ったが、微妙なニュアンスの違いを説明する自信がなかったので、そう答えた。

「皓さんはハッカーね？」

皓は微笑んだ。ハッカーとは、自ら名乗るものではない。他人からそう言われて初めてハッカー足り得るのだ。自分からハッカーと名乗る奴に限って、ろくなスキルも持っていない三流クラッキング野郎であることが多い。

「君は、ハッキングについて、どのくらい知ってる？」

「映画で観たことがあるわ」

有佳は映画が好きなのだ。

「ウォー・ゲームかい」

「ロバート・レッドフォードの『スニーカーズ』とか、サンドラ・ブロックの『ザ・ネット』とか……」

皓は、そのどちらも知らなかった。

映画は好きだが、ハッキングを扱った映画を観ることはほとんどない。視覚効果にこだわって、内容が嘘で固められているからだ。

まあ、あまり詳しくハッキングの手口を紹介することもできない事情もわかるが……。

今まで観た映画の中では「ウォー・ゲーム」が一番まじだった。古典的ではあるが、基本となるハッキング技術が満載されている。

ハッキング・テクニクについて、有佳に詳しく言っても理解できないだろうから、簡単な説明でお茶を濁すことにした。少なくとも、これから自分

が行うことの、アウトラインだけでも有佳には知っておいて欲しかったのだ。

「ハッキングに使うコンピュータは何でも良いんだ。ウインドウズでも、マックでもUNIX（ユニックス）でも」

「ユニックス？」

「大学や企業などで使われているネットワーク用のOSさ」

「OSって」

「ウインドウズは聞いたことあるだろう。あれさ。UNIXは、その大規模なやつ。使うマシンは何でもいいんだが、進入の対象となるマシンは、ほとんどがUNIXベースのマシンだから、ハッキングには、まずUNIXに精通する必要がある。あと、サン・マイクロシステムズのソラリスなんかもあるけど、やはりUNIXだな。まあ、インターネット自体、UNIXのネットワークの拡張版みたいなものだから……」

有佳は真剣な表情で聞いている。

「ところで、君の見た映画では、どうやってハッキングしていた？」

「よく分からないけど、複雑な単語を、ばあーって打つの。魔法みたいに」

皓は頷いた。

「それもひとつの方法だ。だが、ハッキングの一番基本的な方法は……」

一呼吸おいて続ける。

「プロバイダの管理人をかたって、客からパスワードを聞き出すことだ」

有佳の眼が丸くなった。

「それって、ただの詐欺じゃないの」

「社会的なセキュリティの甘さをつく、ソーシャル・ハッキングと言うんだけど、これが、世に言う一流ハッカーの最初の手口でもあるのさ。あのミトニックも、これで多くのパスワードを手に入れていた」

「信じられないわ」

「ネットワークの知識など全然必要ないからね。でも、この手口は今でも広

く行われているんだよ。だから、プロバイダのホームページには、『当社の関係者が電話や手紙などで直接パスワードを尋ねることはありません』と必ず書いてある。わざわざ強調するのは、まだひっかかる人間が多いということさ。クラッキングというのは、つまりはIDとパスワードを手に入れることだからね」

「信じられないわ」

「最近でこそ減ったようだが、以前は、IDやパスワードを忘れないように、ご丁寧にディスプレイの前に貼り付けている人も多かった。清掃員を装って会社に入り込み、オフィスをぐるっと一回りするだけで、IDやパスワードが、簡単に手に入ったものさ。

あと、覚えるのに楽だから、IDとパスワードを同じにするジョー・アカウントも以前は多かった。

IDやパスワードを打ち込むときに、後ろからのぞき込むショルダー・ハック。捨てられたメモなどから探るダスト・ハントなどは、今も有効なソーシャル・ハッキングの手口だな」

「皓さん」

「なに？」

「すごく楽しそうね」

「何を言うんだ。今のはハッキングを防ぐための知識なんだ。だから君も含めて、良い子はまねをしちゃだめだよ」

皓は、冗談めかしてそう言った。

「はい」

有佳が素直に頷く。

「でも、ハッカーって、日本に何人くらいいるの？」

「真のハッカーは少ない。五人もいないだろう。クラッカーだと、そうだな、他人のクレジットカードで買い物ができるくらいのスキルを持つ者だと一

万人くらい……。インターネットの裏ホームページに落ちている、ジョン・ザ・リッパ（切り裂きジョン）やクラッカー・ジャックなどのパスワード・クラッカーというソフトを使うと高校生でもクラッキングが可能だし……。これは、暗号化されたパスワードを解読するソフトなんだ。仕組みは簡単だが結構使える。取ってきた暗号化パスワードと、パスワードとしてよく使われる文字列を集めた辞書を基に片っ端から暗号化して比較し、一致した辞書の文字列がパスワードになるんだ。ちよつと古い方法だけど、今でもセキュリティの甘いサイトだと結構使える。これを使える程度のスキルも含めると十万人近いんじゃないかな」

「そんなに？」

「被害にあっても、公表されることが少ないから、一般には知られていないのや」

実際、ハッキングは至る所に存在する。

何も難しい方法でアタックする必要はない。サイトにある技術的な欠陥、セキュリティ・ホールを正面から突く必要などないのだ。本当の意味でセキュリティ・ホールがあるのは、人の心の中なのだから。

「皓さんは、世界で一番のハッカー？」

有佳の素朴な質問に皓は苦笑した。

「とんでもない。ハッカー、クラッカーを併せて、この世界には化け物のような人物がたくさんいる。インドの「シヴァ」や台湾の黒客『範』、デンマークの「ヤン」などだな」

『シヴァ』に『範』に『ヤン』？」

「ハンドル名、つまり渾名あだなだよ。『シヴァ』も『範』も凄いが、まあ、俺の知る限りでは、人格、ハッキング技術、共に最高なのは、『ザンパノ』という名の人物だ。MIT（マサチューセッツ工科大）の学生らしいという噂だけで、詳しい事は何も分からない。まあ、分からないからこそ、彼は最高の

ハッカーなんだけどね」

皓はしばらく迷ったが、思い切って言った。

「恥ずかしながら、俺は、彼にあやかってハンドル名をつけた」

「なんて名前？」

『『ジェルソミーナ』』

「……」

有佳の眼が、ぱちぱちとしばいた。

「どうしたんだ」

『『道』ね。フェリーニの』

そう言って、なんだか悲しそうな顔になる。

言うまでもなく、『『道』』はイタリアのフェデリコ・フェリーニ監督が、妻のジュリエッタ・マシーナをヒロインに撮ったロード・ムービーの名作だ。胸に結んだ鎖を筋肉で引きちぎる芸で、その日を暮らす旅芸人ザンパノと、彼に金で買われたヒロイン、ジェルソミーナ。ふたりを襲う悲劇。やがて、ショックで気の触れたジェルソミーナをザンパノは置き去りにする。数年後、ザンパノがジェルソミーナの死を知り号泣するところで映画は終わる。

「ロード・ムービーには名作が多いが、一番好きなのは『道』だな。『ザンパノ』は明らかに『道』からとったハンドル名だろう。彼と俺は映画の趣味も似ているのさ。彼は、映画のザンパノそのままに、力業でサーバーをこじ開ける豪快な方法でハッキングし、しかも後に何の痕跡も残さない」

「皓さんや、ザンパノさんなら、どんなことでもできてしまうわね」

「どんなことでもっていうのは大げさだよ……。さつき天才ハッカー、ケビン・ミトニックが結局どうなったか言わなかったかな？」

有佳は頷いた。

「彼は、国防総省に侵入したあと、FBIに逮捕されて、五年間服役した」

「……」

「つまり、侵入することはできるが、逃げ切ることは難しいのさ。侵入する際には、多くの足跡を至る所に残してしまうから。それを消すスキルも必要なんだが、まさしく秒針分歩でセキュリティはきつくなって、たとえ侵入ができて、その痕跡を完全に消し去るのは難しくなっている。ハッキングするのも容易じゃないんだ。

何気なくインターネットでアクセスするだけでも、手に入れる気のあるサイトなら、こちらの情報をかなり多く手に入れることができる。

まあ、そのためにプロクシと呼ばれるクッションを通すんだけど。それも、一つだけでなく、何段も通した方が安全だ。ハッカーの基本標語さ『クシを刺せ』っていうのはね」

「クシを刺せ、か。面白いわね」

「ハッカーは、ちよつとした方法で、何本もの多段クシを刺す。もともとプロクシは、例えばインターネットの負荷を減らせるから、プロバイダからも推奨されていて、詳しい内容を知らずに使っている人はたくさんいる。

使っていない人は、自分の情報が、いろんな場所で抜き取られている可能性があると知った方がいいね。

まあ、これから侵入するのは、ただの会社のサーバーだ。セキュリティはきついかも知れないが、国防総省のような激しい追跡調査はない。それに、自衛のために調べるだけで、知ったことを悪用はしないよ。それじゃ完全なクラッキングになってしまう」

逮捕と聞かされて、有佳は心配げな顔をしていたが、皓が断言したことで、気を取り直したように言った。

「わかったわ。じゃ、おいしいコーヒーをいれてあげる」

「ありがとう。豆は切らしているから、インスタントで頼む。冷凍庫に入れてあるから」

「もう無くなったの？一昨日買ったばかりでしょ。一体、一日に何倍飲む

の？」

「三十杯くらいかな？。それでもヴォルテールの五十杯よりましさ」

「豆を買って来ましょうか？インスタントじゃ物足りないでしょ」

「インスタント・コーヒーを馬鹿にしちゃいけない。知っている人は少ないが、日本人の発明なんだぜ」

「ほんとに？」

「明治三十四年に東京の科学者カトウ・サトリ氏が、汎アメリカ博覧会に出品したのが世界最初での粉末コーヒーだ。製法は、今とほとんど同じ真空乾燥法。当時の名前はインスタントではなく、ソリュブル（溶ける）コーヒーだったらしいが……。カトウ氏は特許を取っていなかったので、今では、どんな漢字をあてるかも分からない無名の人になってしまったんだな。」

その後、三十六年経って、スイスのネスレ社が大豊作が続いたブラジル政府の依頼で、七年がかりで開発したのが今のインスタント・コーヒーだ」

「はいはい。わかりました……」

有佳は、冷凍庫から取り出したインスタント・コーヒーに湯を注いだ。

皓にカップを手渡す。

「今までの説明で、だいたい分かってくれたかな」

有佳がくれたコーヒーを、一口飲んで、皓は尋ねた。

有佳は自信なさそうに頷く。

彼女は、語学と機械類がひどく苦手なのだ。

通っていた短大でも英語とワープロを使ったレポートの提出が、頭痛の種だったらしい。

勤めている歯科医院の事務でも、そのコンピュータの操作から逃げ回っているという。

「今日、先生から、その機械アレルギーを治さないと、辞めてもらわなけれ

ばならんよ、って脅されたのよ」

一週間前、有佳はそう言った。

有佳の勤めている和田歯科は、家庭的な雰囲気の医院で、もちろん、その言葉は冗談に違いないが、コンピュータが専門の自分が傍にいるのに、有佳がそんなふうに言われるのは気に入らなかった。

「エクセルやワードの操作くらいなら教えるのに」

プログラミングの知識が必要なVBAや統計解析まで手を広げると面倒だが、表を作ったり、文書を作るくらいなら、三日も教えれば使えるようになる。

初心者にとって面倒なのは、キーボードになれる事なのだ。

それとて、有佳のように若ければ、たちまちタッチタイピングを難なくこなせるようになるだろう。

だが、有佳は恐ろしいものを見たかのように、ふるふると首を振った。

「とんでもないわ。先生からコンピュータを使えと言われた時に、マウスっていうの？あれをテレビにあてて動かそうとして笑われたんだから……。今でも、患者さんの管理用のソフトしか扱えないわ」

「まさか、それじゃ親父ギャグだよ。まあ、あまりコンピュータ漬けの生活ってのも考えものだからね。インターネットを操作する時間が週五時間を超えると、社会性と協調性に問題が生じるという報告もあるし……」

「よく言うわ」

有佳はからっと笑った。

「あなたは、一日に何時間コンピュータに触っているの」

「それほどじゃない。一三時間くらいかな」

「充分すぎるわよ」

「これから、佐分利がクラックしたらしいサイトを調べてみる。本社も調べ

よう」

言ってから、辞めて何年も経つのに、いまだに『本社』という自分に苦笑する。

「でも、皓さんは、パスワードを知っているの？」

「もちろん知らない。だから、真つ正面から技術的クラックに挑戦するのさ。

ザンパノ流で。現在主流となっているアタックは、バッファ・オーバーフローを利用する方法で……」

有佳は笑い出した。

「もう説明はやめて。皓さん。とつても覚えられないわ。終わったら呼んでね。晩ご飯を作るから……」

そう言つて有佳は部屋を出ていった。

皓は指を鳴らして、クラッキングに取り組み始めた。

再び、大男がやってきたのは、二日後のことだった。今度は一人だ。現れるなり、靴を脱いで、ずかすかと部屋に上がり込んできた。

どかりと座りこんで畳の上であぐらをかいて言う。

「悪いがあんたのことを調べさせてもらった」

それには答えず、男の前に座りながら皓が尋ねた。

「あんたの名前は？」

「横尾 剛」

その名は、先日引き出した浅野グループの資料にあった。

大物だった。

年齢が若く、現場に出ているからチンピラとばかり思っていたが、浅野グループでもベスト三に入る実力者だ。

資料には、確か三七歳とあったはずだ。

東大法科卒のインテリ・ヤクザだ。

「ついてなかったな、あんた」

横尾が言った。

皓は黙っていた。破れた畳の縁を見つめて思う。

そう、ついてなかった。

子供の頃、佐分利と出会ったのも、佐分利が同じ会社を選んだのも。

そう思わなければ、やっていられない。

「ゼロ・デビジョンなのさ」

ふつりと呟いた。

「零の割算？なんだそりゃ」

横尾がすぐにそう言った。経歴書にあった通り、学はある。

「正確にはデビジョン　バイ　ゼロ、零による除算、だ。言いやすいように、俺達はそう呼んでいたのさ。昔、もう十五年以上前だな、作ったプログラムを走らせて、原因不明のバグがあった時に出たエラー表示さ。数学じゃ、一般にゼロで割ることは定義されていない。ポインタのアドレス指定が間違っていたり、スタックがオーバーフローするような、原因がよく分からないバグがあった時に、このエラー表示が出る。それから転じて、俺達が、仲間内で『割り切れない』『説明ができない』という意味で使うようになった言葉だ。技術者の内輪ギャグだな。どうしようもないってことだ」

「なるほど……」

そう言って、横尾はしばらく皓の顔を見ていたが、

「調べるうちに、あんたに対する疑いが晴れたわけじゃないが、佐分利があんたとつるんでるっていう話も無さそうな気がしてきた」

「それは、ありがたい」

皓の名前は、横尾の持つリストのかなり後方に後退したらしい。

「ところで、話がある」

改まった口調で横尾が言った。

「何だ」

「俺達は必死で佐分利の行方を探しているが、どうも成果があらん。そこで、あんたに手伝ってもらいたいんだ」

「ごめんだな」

「なぜだ？佐分利はあんたを陥れた奴じゃないか。奴の行方を探し出しても、気に病むことは無いだろう」

そう言いながら、突然妙な顔になり、内ポケットから携帯電話を取り出した。

ボタンを捜査して、液晶表示をじっと眺めている。

どうやら、メールが届いてポケットの中で振動していたらしい。

しばらくして電話をポケットにしまうと、

「じゃあ、頼んだぜ。礼はする」

そう言い残して横尾は部屋を出ていった。

それから四日後。皓は一人、リンの部屋に立っていた。

あれ以来、横尾は姿を見せなかった。佐分利の行方もわかっていない。

アパートは、一つの事件を覗いて平穏だった。

一つの事件。

リンが、不法滞在、就労でベトナムに強制送還されたのだ。

通知が届いた時、リンは泣いた。

彼女は、大金を支払う契約で、裏組織によって日本に送り込まれていたのだ。

皓は知っている。

彼女の稼ぎの大半が組織に奪われ、残りが家族への送金に当てられていたことを。

彼女が美しいフランス語を話すことを。

リンは、日本語より英語よりフランス語が話せることを誇りに思っていた。ずっと昔、ベトナムがフランスの植民地だった頃に、少女時代を過ごした祖母に教わったのだ。

リンは、仕事が休みの日には、部屋の壁にもたれてラヴィアン・ローズを歌っていた。外出すれば金がある。そんな無駄遣いをする余裕は彼女には無かったのだ。

皓は、廊下を挟んで聞こえてくる澄んだ歌声が好きだった。

リン・イエンの歌声は、みすばらしいアパートの中でひっそり輝く宝石だった。

現実には、一つずつ皓から大切なものを奪っていく。

がらんとしたリンの部屋を見回した皓は、溜息をついて部屋に戻った。

崩れ落ちるように椅子に座り、マシンを立ち上げてインターネットにつなぐ。

メールをチェックしようとして、思いついて映画のデータベースにアクセスした。有佳から聞いた映画の内容が気になっていたので。どうせたいした事はないだろうが、スクリーンの中のハッキングを観るのも悪くない。

そこそこ良さそうなら、たまにビデオでも借りて気分転換するのも良いだろう。このところ、嫌なことが続いている。皓は、映画の検索を始めた。

翌日。

仕事を終えて、皓は近くの公園に出かけた。

砂場の傍のベンチに腰をかける。

今日は水曜日だ。時刻は午後二時四十分。

もうすぐ、目の前の道を有佳が帰ってくるはずだ。

秋も深まったというのに、吹く風は暖かく、春のような陽気だった。

ベンチにもたれながら体を伸ばし、空を仰ぎ見る。

美しい蒼空だ。

こんな晴れた空を見るのは何日ぶりだろう。

突然、足下に小さなボールが転がってきた。

見ると、よちよちと四歳くらいの子供が、両手を広げてこちらに走って来る。

「ちよーだい」

舌足らずに言うその子に

「ほら」

そう言って、ボールを優しく投げ返す。

「皓さん」

背後から声がした。

振り返ると、有佳が立っていた。

「待っていたんだ」

皓は、一瞬、躊躇して続ける。

「ザンパノ……」

さっと有佳の顔色が変わった。

「わ、私は……」

「君はザンパノだろ」

「……」

「座ろう。長くなる」

有佳をベンチに腰掛けさせると、皓は単刀直入に切り出した。

「佐分利が失踪したことを知った日、横尾達が去ったあと、君は、俺を君の部屋に連れて行った。その時、君は、掃除をする振りをしてコンピュータを結線し、サーバーに残されたザンパノの痕跡を消した……そうだね」

有佳は、蒼白な顔色になった。空の蒼さが顔に投影されているようだ。

皓の胸は痛んだ。もう、いいじゃないか。自分自身の声が聞こえる。だが、

意志に反して皓の口は言葉を続けた。

「俺が部屋に戻ろうとすると、君は俺を引き留めた。それは、今まで動いていたコンピュータの温もりで、君がコンピュータを使った事を知られたく無かったからだ。だから君は、冷房をつけっぱなしにしておいた。マシンを速く冷やすために……」

「……なぜ分かったの？」

「ほんの偶然さ。昨日の夜、君が話した映画の内容を調べようとして検索してみたんだ。だが、『スニーカーズ』はあったが、『ザ・ネット』は見つからなかった。次に、主演のサンドラ・ブロックをキーワードにして検索すると、『ザ・インターネット』が引っかった。内容を見ると、どうもこれが君の言った映画のようだ。最初は、君が題名を間違えたと思ったが、やがて『ザ・インターネット』が邦題で、原題は『ザ・ネット』であるのに気づいた。

英語の苦手な君が、なぜ原題で映画の題名を覚えている？ 覚え間違えたただけだろうか？

だが、ひよつとしたら、君はアメリカに行ったことがあって、そこで、『ザ・ネット』を観たのかもしれない。そうだとしたら、どうして過去を偽る必要があるのだろうか。

まさかと思いつながら、俺は、サーバーのチェックをしてみた」

有佳は黙っている。

「通信記録には異常がなかった。しかし、サーバーを調べているうち、去年、依頼されて、実験的に作った侵入監視用のプログラムの存在をふと思いついた。俺のオリジナルだ。何気なく調べてみると、明らかに俺がつないでいないアクセス記録が残っている。俺のサーバーは普段外部とはつながっていない。ただインターネットにつなぐ時だけデジタル回線に接続するんだ。記録に残るのは、外からつながれたものではなくて、俺の部屋から外部につない

だ時のものだ。

つまり、俺以外の誰かが、俺のコンピュータを使ってインターネットにアクセスしているということだ。不正記録が残っているのは、俺がテストで作った監視プログラムだけで、他の一般的な監視プログラムの記録はすべて正常だった。その手口はザンパノそっくりだ」

有佳は唇をかみしめている。

「その時は、まだ君を信じていた。信じていたかった。まさかとは思ったが、俺は、M I Tに侵入して、学生名簿を引っぱり出して調べてみた。すると…

…」

「皓さん」

有佳の言葉に、かぶせるように皓は言った。

「ドクター・コースに君の名前が載っていた」

「皓さん、聞いて！」

「それとも一つ。昨日、佐分利が俺にメールを送ってきた」

「彼は、生きているの！」

「期日指定メールだった。出した日付は八日前だ。多分、奴は死んでいるよ」
そう言って、皓は数枚の紙を有佳に渡した。

「これだ」

A 4用紙にプリントアウトされた文章は短かいものだった。

久しぶりだな、志野。

突然、こんなメールを受け取って、お前は困惑しているだろう。

だが、俺の最後のメッセージだ。すぐに捨てないで最後まで呼んでくれ。
最初は、電話をかけようと思って電話番号を調べたが、どう話し出せば良
いか思いつかなくてメールにした。

聡美が死んでから俺はずいぶん苦しんだが、心を決めたら、すっと楽にな

ったよ。

俺は、今までやってきた俺の生き方を間違っているとは思ってはいない。どのみち、二百年生きる人間などいないのだからな。生きているうちに、やるだけのことはやりたかった。

その結果、俺はここまでできた。そして、ここが終点だ。

ただ、お前に対してやったことだけは、今までずっと心に引っかかっていった。

すまなかった。

許してくれとは言わない。ただ、今の俺の気持ちを伝えておきたかった。もう会うこともないだろう。

佐分利 慎一

「ひどく爽やかな文章だ。おそらく、我執がすっきりと吹っ切れたのだろうな」

俺には分からないが、と、心の中で呟く。

「これは遺言ね……遺言でまで自分勝手なことを言ってるわ」

有佳は、はっとするほど冷たい口調で言い放った。

「君は、うまくやったよ。浅野グループの資金二五〇万円を佐分利の口座に振り込んでから、ちよっとした痕跡を残しつつ、機密データを佐分利のデータバンクに移動する。ザンパノのスキルなら簡単だろう。データ漏洩発覚のきっかけにするためだったから移動する金額は少なくともよかった。浅野に気づかせるだけで良いからな。それだけで奴らは佐分利を葬り去る。ただ、分からないのは、君が、なぜそれほどまでに佐分利の奴を陥れようとしたか、だ」

「それは……、佐分利が私の姉を殺したから」

有佳の目がきらきらと輝きだした。青ざめた頬の血色が良くなる。

「姉？」

あの位牌……。

「私の姉の名前は香田聡美。結婚して佐分利聡美になったの」

「何だって！」

「私たちは、異母姉妹なのよ」

砂場の向こうで、先ほどの子供が、母親とボールを転がしあっている。

「可愛いわね」

「……」

「姉には赤ちゃんがいたの。検死解剖の結果分かったのよ。佐分利の子供よ。あいつは人を二人も殺したのよ」

有佳は空を見上げた。澄んだ、美しい蒼空だったが、有佳の眼はその先にある漆黒の宇宙を見つめているようだった。

「父と姉の母親が別れた時、姉は母方に引き取られたの。父は、本当は自分が引き取って育てたかったらしいけど、姉の母親が拒んだのよ。その後、父は私の母と再婚し、私が生まれた。幼い頃、私達には行き来があって、よく姉がうちへ泊まりに来たり、私が遊びに行ったりしたわ。私は姉の母親を叔母さんと呼んでいた。

叔母さんは、私や私の母の事を憎んではいなかった。娘さえそばに居てくれたら満足だ、そう思っているのが私には分かったわ。後で聞いたことだけ、叔母さんは、祖母とそりが合わなかったらしい」

皓は黙って聞いていた。

「年は離れていたけど、不思議に姉と私は仲が良かった。でも、姉は自分を捨てた父を憎んでいた。だから、叔母さんが死んだ時、姉は父に引き取られずに、父の友人夫婦の養子になったの」

「香田部長か……」

皓は、かつて自分の上司であった男の名を呟いた。

「私が一二歳の時、父がニューヨークに転勤になったの。二年経って帰国する時、私はニューヨークに残ったわ。親しくしていた大学教授の家にホームステイさせてもらって。ちょうどその頃から、コロンビア大学に通うようになっていたから……」

「飛び級だな」

数学関係の才能があったのだろう。有佳は、そのころから、ハッカー・ザンパノの片鱗を見せていたに違いない。

「帰国してすぐに父が亡くなり、後を追うように母も死んだの……。アメリカにいる時に、祖母は死んでいたから、私の身内は姉さんだけになったわ」
どんな気持ちだったのだろう。唯一人、異国で暮らすうち、瞬く間に家族が無くなった少女は……。

「その後、君は、MITの博士課程に進んだ」

有佳は頷いた。

「姉さんが北穂高で死んだと聞いて、私はすぐにアメリカから帰って来たわ。姉さんが養子になった時の約束でお葬式には出なかったけど」

有佳の声が震えた。

「姉さんは、大切にされてなかった。佐分利は、姉の死後も平然と会社に出社して仕事をこなしていたわ。それだけじゃなく、社長の娘と付き合っ、位牌すら手元に置こうとしなかった」

「奴は無神論者だったからな」

暗の言葉を見捨てて有佳は続けた。

「たまに掛かってくる姉さんの電話は、いつも正午頃だった」

有佳は子供のように叫んだ。正しいと思ってやったことを、大人に咎められた子供のようにだ。

どうして、私ばかり責めるの、私は悪くない。

そう、その目は主張していた。

「日本では午前二時頃よ。夫を待ちくたびれて電話してるって……その時間だと、学生の私でも部屋にいないことは多いわ。だから、姉さんは留守番電話に最近あった身近な出来事を録音してくれたの。日本が恋しくないようにって。最後に、何があっても私はあなたの姉さんだから、あなたは一人じゃないのよっていうメッセージと一緒にね」

強い調子で有佳は続けた。

「だから私はやったのよ。佐分利が最近関わった仕事から浅野グループの名を引き出し、資料を調べて、それが暴力団だと分かったから」

「すべて、僕のマシンとIPアドレスを使ったんだろう」

「そうよ、でも、クシは何本も通したし、サーバーにあなたの痕跡を残すよくなへまはしてないわ」

皓は頷いた。ザンパノなら当たり前だ。

「君は、なぜ俺に近づいたんだ。俺が『ジェルソミーナ』だと知っていたからか？」

有佳は首を振った。

「謙遜しないで。ネットの上で『ジェルソミーナ』が志野 皓だと分かる人間などいないわ。あなたが『ジェルソミーナ』だと知った時は、本当に驚いた」

そう言って、有佳は地面に落ちている枯葉を拾った。葉の軸を持って、くるくる回しだす。

「去年の暮れに、日本に帰国した時、姉の養父が佐分利の話をするついでに、あなたの名を出したの。養父は、姉が佐分利に冷たくされていることを薄々感じていたみたい。佐分利を嫌っていた。その話の中で、皓さんが佐分利に陥れられ、今、個人でネットの仕事をしている事を知ったの。だから、今回、姉の復讐をするにあたって、あなたのマシンなら佐分利を陥れる罠を張るのにぴったりだと思ったのよ」

「……」

「あなたに迷惑をかけるつもりは無かった。知らなかったのよ。佐分利があなたのメモを残していたなんて……」

「なぜ、奴が聡美さんを殺したと思ったんだ？」

「彼が、ロープの結び目をわざと緩くして、姉が落ちるようにし向けたからよ。私は調べたの。昔から、ボーイスカウトや登山部で、佐分利のロープワークには定評があった。そんな彼が、命のかかったロープの結び目を間違える訳はないわ。あいつはわざと間違えてロープを結んだ。もつと上を目指すために、咲子と一緒にするために、姉が邪魔になったのよ」

「違う！」

皓が大声を出した。砂場の母子が驚いたようにこちらを見る。

「違うんだ」

声を落として皓は続けた。

「何が違うの？」

「俺は……俺は、奴を昔から知っている。ボーイスカウトでも結索と一緒に学んだ仲だ」

「だから？」

「俺達が学んだ、もやい結びは、基本的に自分が助けてもらうためのものだった」

「……」

「だから、もやい結びの結索訓練も、自分が河に流された時を想定して、投げられたロープを三秒以内に腰に回して腹の前で結ぶものだ……」

「何が言いたいのか？」

「奴は、もやい結びを、反対から結べなかったんだ。子供の頃からそうだった。ゆっくりやればできたのかも知れないが、急いでやると、奴は、いつも最後の締めを反対に回して強く引くと解けるように締めてしまう。白状する

と俺もそうさ。投げられたロープを自分の体に回し、もやい結びをすることはできるが、反対からだど、どうもうまくいかない。慌ていたら、ましてどうなるか分からない。だから、俺は聡美さんが死んだ時、殺人の可能性をまったく考えなかったんだ」

《反対からは結べない！》

突然、稲妻に撃たれたように、有佳の脳裏に記憶が蘇った。

父が亡くなり、遺品を整理していた時のことだ。

母が、畳に広げた百本近いネクタイの海から、父のお気に入りだったネクタイを拾い上げ、自分の首に締めてみようとしてみたのだった。

「変ねえ。あれほど毎日、何千回もネクタイを締めてあげたのに、自分の首にはうまく締められないわ」

鏡の前で、力無く母は笑った。

「有佳、こっちに来て……」

言われるままに、黙って母の前に立った。

母は、するりとネクタイを有佳の首に回し、シュルシュルと小気味よい音を立てて、ネクタイを締めた。締め終わると、前後の長さも結び目のデザインも絶妙の位置にある。

「やっぱり、こっちからでない駄目ね。でも、ネクタイを締めるのも、これが最後」

言うなり母の声は涙声になった。顔をくしゃくしゃにして泣き出す。

「佐分利慎一は、反対からでは、正しくもやい結びを結べなかった……」

呆然とする有佳に皓は続けた。

「結果的に、佐分利を追い込んだのは、君が送ったロープだったんだろう」
「佐分利の口座にお金を移したあと、誰がそうさせたかを教えるために、ボウライン・ノットを送ったわ。姉が死んだ時に使われたのと同じロープで」
「佐分利はプライドの高い男だ。表面に出さなくても、奴なりに衝撃を受け

ていたんだろう。そこへ、妻を殺した証拠ともいうべき、もやい結びのロープが送られてきて、奴は完全に壊れた。だが……」

沈黙が続いた。

「なぜ、リン・イエンを密告した。君なんだろう？」

有佳は呆然とした表情のまま答えた。

「浅野グループの男が初めて来たあの日、リンは、私があなただのコンピュータを操作しているのを見たの」

「それで？」

「リンは、私があなただからコンピュータの操作を教わったと思ったのよ。彼女もコンピュータを扱えるようになりたいって。そうすれば、もっと楽で実入りの良い仕事に就けるから。だけど、彼女の口から、私がコンピュータを操作していたことがあなたに伝われば、きっとあなたは私を疑いだすわ。私は……」

有佳の声は、聞こえないほど小さくなった。

「あなたには、知られたくなかった……」

ベトナムに戻ったリンは、一体どうしているだろう。皓は眼を閉じた。

「私をどうするの」

皓はため息をついた。

「どうもできない。犯罪の証拠すら無いんだ。知っているのは俺だけだし、他人に言う気も無い。だから……」

「だから？」

「俺の前から消えてくれ」

「皓さん。聞いて！」

胸の前で合わされた有佳の手が、苦悶するように動いた。

「なるほど、確かに、君は誰も直接には傷つけていない。リン・イエンは、法律を犯して不法滞在していたから、強制送還は仕方ないのかも知れない。

佐分利は、多くの人間を陥れてきた報いを受けただけかも知れない。

だが、俺は、君のやったことが許せない。君は、佐分利にロープを送り、死にかけていた奴の背中を押した。すべてを賭けて日本にやってきたリンの人生を握りつぶした！」

「待って、待って！」

有佳の声が震えた。

「最初から無理だったんだよ」

皓は笑った。空虚な笑いだ。

「ザンパノとジェルソミーナじゃ、うまくいくわけない」

有佳はベンチから立ち上がって、皓の背後に回り、しばらくそのまま立っていた

泣いているかどうかはわからない。

が、やがて、しっかりとした足音を残して遠ざかっていった。

皓は振り向かず、有佳のまっすぐな視線を思い出していた。

皓の頬に苦い微笑みが浮かんだ。

四十年近く人生を生きても、人の心は分からない。特に女心は……

「終わったようだな」

振り向くと、横尾が立っていた。

大きな凶体の割に動作が機敏だ。背後に立つまで、足音一つさせなかった。

「佐分利の死体が今朝見つかったぜ。自殺だってことだ」

「北補高の山頂近く。山小屋のちよつと手前だろう」

「なぜ分かる」

「奥さん、聡美さんの滑落した場所だ」

「お前……知っていたのか？」

「知らなかったさ。だが、あいつが死ぬ時に選ぶ場所は分かる」

「そんなもんかな。ところで……」

横尾は、サングラスの上から覗くようにして続けた。巨体と雰囲気似合
わぬ、つぶらな瞳が見える。

「オヤジが言っていた。金が戻ったそうだ。昨日のうちに振り込まれてい
らしい。盗まれたデータが入ったMOも今日届いた。佐分利の名前で、責任
をとって自殺するから両親や親戚に迷惑をかけないでくれというワープロ
文書と一緒にな」

「良かったな」

「良くはない！」

横尾の声が大きくなった。

「オヤジは納得している。金は戻ったし、責任者はこっちがヤバくならねえ
方法で死んだ。オトシマエはついた。だが、俺は気にいらねえ」

「何が気に入らない」

「何もかもだ。金が振り込まれたのは昨日の夜だ。佐分利は死んでから六日
経っている。奴がやったんじゃない。考えられるのは、誰かが奴の名を騙っ
て金を戻して、データを送り返したってことだ。その誰かっつのは誰だ？」

横尾の声が大きくなった。皓には彼の気持ちがあつた。不安なのだ。度
胸と暴力で築いてきた自分の人生とは別の強大な力を目の当たりにして、不
安で仕方がないのだ。

「……」

「一体、お前達は何なんだ？ただのパソコン・オタクじゃねえか。額に汗し
てまっとうに稼いでもいねえし、俺達のように体を張って生きてすらいない。
ただ机の前に座って、カチャカチャとキーボードを叩いて、神様にでもなっ
たつもりか？何でもできると思っっているんだろう」

皓は、突然の怒りに体が熱くなった。立ち上がって横尾と向き合う。

「何もできやしないさ。俺達は普通の人間だ。医者のように人を生かすこと

も、お前達のように殺すこともできない……。それどころか、自分の感情すらコントロールできない、できそこないなんだよ」

横尾がぐつと近づいて言った。

「それでも、お前達は、金を自在に動かしてデータを盗み出すことができる」「いいか。ハッキングってのは、確率の問題なんだ。侵入するいろいろな方法を知っていても、対処が施されていたら、何の役にも立たない。対象となるサイトのセキュリティ・ホールが埋められているかどうかは、純粹に確率の問題だ。専門家がセキュリティをチェックする銀行などのサイトに侵入するのは、現実的には、ほとんど不可能なんだ」

「だが、お前はやった。だろ？」

皓はふう、と溜息をついた。

「ついていたのさ。もつとも、まだ完全無欠なサーバーは存在しない。当たり前だ。十数年前まで、情報は人の頭の中と、紙の上だけに収まっていたんだぜ。まだ未完成のいい加減なシステムに、知られてはいけない秘密を急いで移し過ぎるからいけないのさ。その不備を突かれて慌てるくらいなら、やらなければいい」

横尾は、じつと皓を見て言った。

「さっきの女が佐分利を陥れたんだな。あんた、彼女の事が好きだったんだろ？」

勘のいい男だ。

横尾はにやりと笑った。

「彼女を利用しようとしても無駄だぜ。すぐアメリカに帰るからな」

「女も良いが、俺は男の方が気になるんだ……」

「そっちの趣味があるのか？」

皓があまりに真面目くさった顔で言ったので、横尾は思わず吹き出した。

二人の男の緊張が解けた。

横尾は、ベンチに巨体をどかりと降ろした。

煙草を深く吸い込み、吐きながら横尾が言う。

「まあ、オヤジには言わないから、安心しな」

「恩にはきかないぜ」

「勝手にしろ！」

横尾は、短くなった煙草をはじき飛ばし、新しく銜えた煙草に火を点ける。

皓は、それをひったくるように取り上げた。

深々と煙を吸い込む。

「五年ぶりの煙草だ。悪くない」

横尾も新しい煙草に火をつける。

黙ったまま、二人はしばらく煙草をふかしていた。

「デイビジョン バイゼロだな」

ぽつりと横尾が言った。

「ああ、デイビジョン バイゼロだ」

皓が答えた。

見上げると、蒼い空は、地平線から徐々に翳雲に浸食されつつあった。

じつとその雲を覗いているうちに、雲に浮かぶ陰影は形を変え、リン・イエ

ンの顔になり、やがて有佳の顔になった。

有佳の顔は、なぜか泣き顔に見えた。

おかしい話だ。俺は有佳の泣き顔を覗いたことがないのに……

そう思いながら、皓はいつまでも雲を眺めていた。

了

最後までお読みいただきありがとうございました。

感想などございましたら、ブログに書き込んでいただくか、以下のアドレスまでお寄せください。

e-mail:kazanari@kabulaya.com

鏑谷嘴矢